

＜小坂公民館 遺跡クラブ主催＞

令和6年6月16日(日)

若き日の紫式部ゆかりの越前市を散策!

【行程】

小坂公民館=====尼御前SA  休憩=====紫ゆかり館・紫式部公園=====「光る君へ 越前大河ドラマ館」===== (食事・道の駅越前たけふ) =====市内散策(府中城跡・本興寺・国分寺・総社大神宮・龍門寺・「ちひろの生まれた家」記念館)=====道の駅越前たけふ=====越前そばの里=====尼御前SA  休憩=====小坂公民館



百人一首 57番より

「めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲がくれにし 夜半(よは)の月かな」



『源氏物語』第5帖「若紫」
飼っていた雀の子を逃がして
しまった紫の上と、柴垣から
隙見する光源氏

『源氏物語』第20帖「朝顔」
「雪まろばし」(雪転ばし)の状
景。邸内にいるのは光源氏と紫
の上。

年代	歳	出来事
元禄元年(970)		紫式部が誕生 する。(天延元年(973)の説もある。)
永延元年(987)	17	藤原道長が源倫子(ともこ)と結婚 する。
正暦元年(990)	20	藤原道隆の長女・ 定子が一条天皇に入内 する。1000年死去
正暦4年(993)	23	清少納言が一条天皇の中宮定子に仕える。
長徳元年(995)	25	若狭国に宋の商人・朱仁聡(しゅじんそう)ら70余人が来着し、その後 松原客館(敦賀) に移され交易を求めた。
長徳2年(996)	26	父・為時は、10年も不遇の身であったが、 右大臣・藤原道長の計らいで、淡路守から越前守に任じられた。 この年の夏か秋頃、 紫式部は父・為時とともに琵琶湖を北上し、険しい峠を越えて5日かけ越前国の国府に着いた。
長徳3年(997)	27	藤原宣孝が紫式部に求婚する。(宣孝に求婚されたときに求婚を拒否して詠んだ歌碑…(紫式部歌碑(1))
長徳4年(998)	28	藤原宣孝と結婚するため、 父・為時を越前に残して単身で帰京 する。
長保元年(999)	29	宣孝と結婚 する。(通い婚) 当時、宣孝は49歳で3人の妻と5人の子供がいた。 道長の長女・彰子が12歳で一条天皇に入内 する。
長保2年(1000)	30	娘の賢子(かたいこ)を出産 する。 賢子はのちに、大式三位(だいにのさんみ)と呼ばれ、母・紫式部とともに女房三十六歌仙の一人とされた。
長保3年(1001)	31	夫・宣孝が疫病で死去 する。 このころ、寂しさをまぎらわすため「物語」を書き始めた。 当時は、竹取物語などが読まれていた。



豆知識

- ①**皇后(中宮)**⇒天皇の正妻。一条天皇の時代、皇后が二名いる時には一方を皇后、もう一方を中宮と呼ぶようになった。
- ②**女御(にょうご)**⇒皇后(中宮)に次ぐ地位で、摂関・関白・大臣の娘になることが多かった。
- ③**更衣(かうい)**⇒女御の下位で、天皇の着替えを務める役だったが、後に天皇の寝所に奉仕するようになった。
- ④**女房(にょうぼう)**⇒朝廷や高貴な人々に仕え、身の回りの世話や来客時の対応など、宮中の雑事を行う女官を指す。女房の名称は、それぞれに一人住まいの「房」(つぼね・部屋)を与えられていたことが由来である。

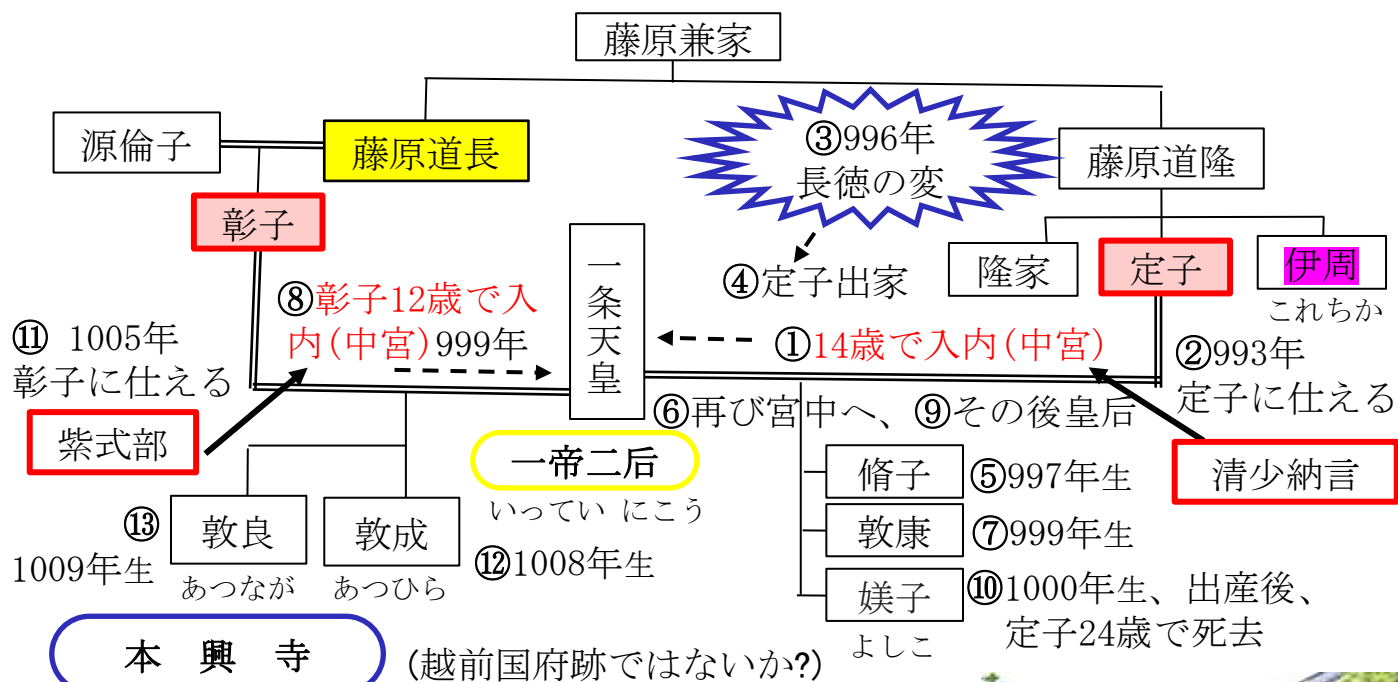
=== 紫式部の名前は「まひろ」？ ===

本名は「香子(かおるこ/たかこ/きょうし)」とする説があるが不明である。

姓が**藤原**と、父・為時が花山天皇のときに、**式部丞**(人事・儀式・教育全般を司る行政機関)の役人であったため、女房名(宮中での呼び名)は「**藤式部**」(とうのしきぶ)だったようだ。

その後、源氏物語のヒロイン「**紫の上**」に因んで、「**紫式部**」と呼ばれた。

年代	歳	出来事
長保3年(1001)	31	父・為時が4年の任期を勤め越前国から帰京する。
寛弘元年(1004)	34	紫式部は、石山寺に籠って新しい物語を思いつくようにと観音様に祈り7日目、月が琵琶湖に映っている景色を見て 源氏物語の一節を思いついて書き始めた。
寛弘2年(1005)	35	紫式部は一条天皇の中宮・彰子に女房として出仕する。 …(紫式部歌碑(3)) (寛弘3年(1006)説もある)
寛弘6年(1009)	39	道長、夜、紫式部の局の戸を叩くという逸話 がある。
寛弘8年(1011)	41	父・為時が越後守となって越後国へ下向する。 同行した弟・惟則(のぶのり)が越後国で死去する。
長和3年(1014)	44	この頃、紫式部が死去 する。 (1016・1018・1031年の説もある) 父・為時が任期1年を残し越後守を辞して帰京する。
万寿4年(1027)		道長が死去 する。(62歳)
長元2年(1029)		父・為時が死去する。(80歳ほど)



紫式部が国府のどの辺りに住んでいたかはよく分かっていないが、現在の本興寺辺りだったのではないかとされている。

父・藤原為時と一緒に越前に来ていた紫式部が、長徳4年(998)、京都へ帰る時に梅を植えたという伝説がある。

紫式部が植えた梅は白梅だったが、紫式部が亡くなったあと、娘の賢子が母をしのんで紅梅を植えた。

それから千年以上の時が経ち、現在、本興寺の境内にある紅梅は、その4代目と言われている。





紫式部公園にある十二単衣の紫式部像は、高さ約3メートルの金箔のブロンズ像で、圓鋸勝三（えんつばかつぞう）氏によって製作されたものである。

紫式部像は、桂（うちき）姿で檜扇（ひおうぎ）を手にして、京の方を向いて立っている。紫式部像が見つめる先は“越前富士”とも呼ばれる日野山で、ここから眺める日野山が特に美しいと言われている。

たけふに向かう 紫式部と父・藤原為時

武生に向かう国司の一行で新任の国の守（かみ）である父・藤原為時は乗馬姿、紫式部は桂（うちき）姿で荷物を担ぐ人たちをねぎらいながら、輿を降りて一休みする木ノ芽峠あたりの情景である。



藤原道長と対面する紫式部

あつひら

敦成親王の「五十日（いか）の祝」の夜、紫式部は道長に祝賀の歌を所望され、咄嗟に歌を詠む場面である。

「いかにいかが 数へやるべき
八千歳（やちとせ）の あまりひさしき
君が御代（みよ）をば」

八千歳の長きにわたって続く皇子の寿命を、いったいどうやって数えたらよいのでしょうか



紫式部歌碑 (1)

春なれど しらねの
みゆき いやつもり
とくべきほどの
いつと なきかな

4



春にはなりましたが、こちらの白山の雪はいよいよ降り積もって、おっしゃるように解けることなんかいつのことかわかりません。(わたしの心もいつ解けるかわかりません。)

この歌は、やがて結婚することになる藤原宣孝との贈答歌である。

当時、敦賀に来ていた宋人に会うことを口実に、宣孝が「春には宋人を見に越前に行き、あなたに会って結婚を申し込みたい」とよこした手紙に対し、紫式部は加賀の白山に積もる雪を詠み込んで、私の心は解けませんと拒否している。

紫式部歌碑 (2)

こゝにかく 日野の杉むら
埋(うず)む雪
をしほ
小塩の松に けふやまがへる

初雪が降り近くに見えるようになった日野山の杉林は埋れんほどに雪が降り積もった。京の都の小塩山の松にも、今日は雪が散り乱れて降っているのだろうか。

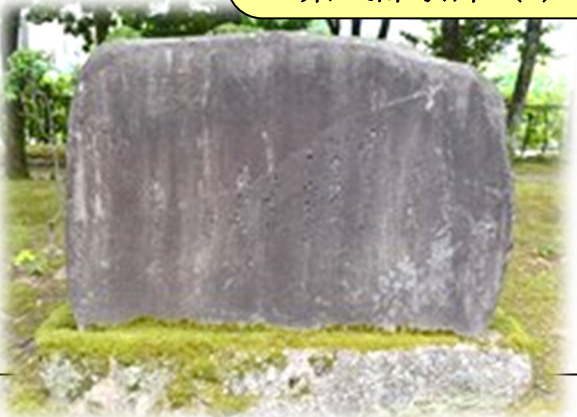


越前で向かえた初めての冬。彼方の日野山は越前富士といわれている。その美しい山の杉林に雪が積もっているのを見ると、京都の小塩山に降り乱れる雪を思い出し、郷愁に浸っている紫式部の姿がしのばれる歌である。

紫式部歌碑 (3)

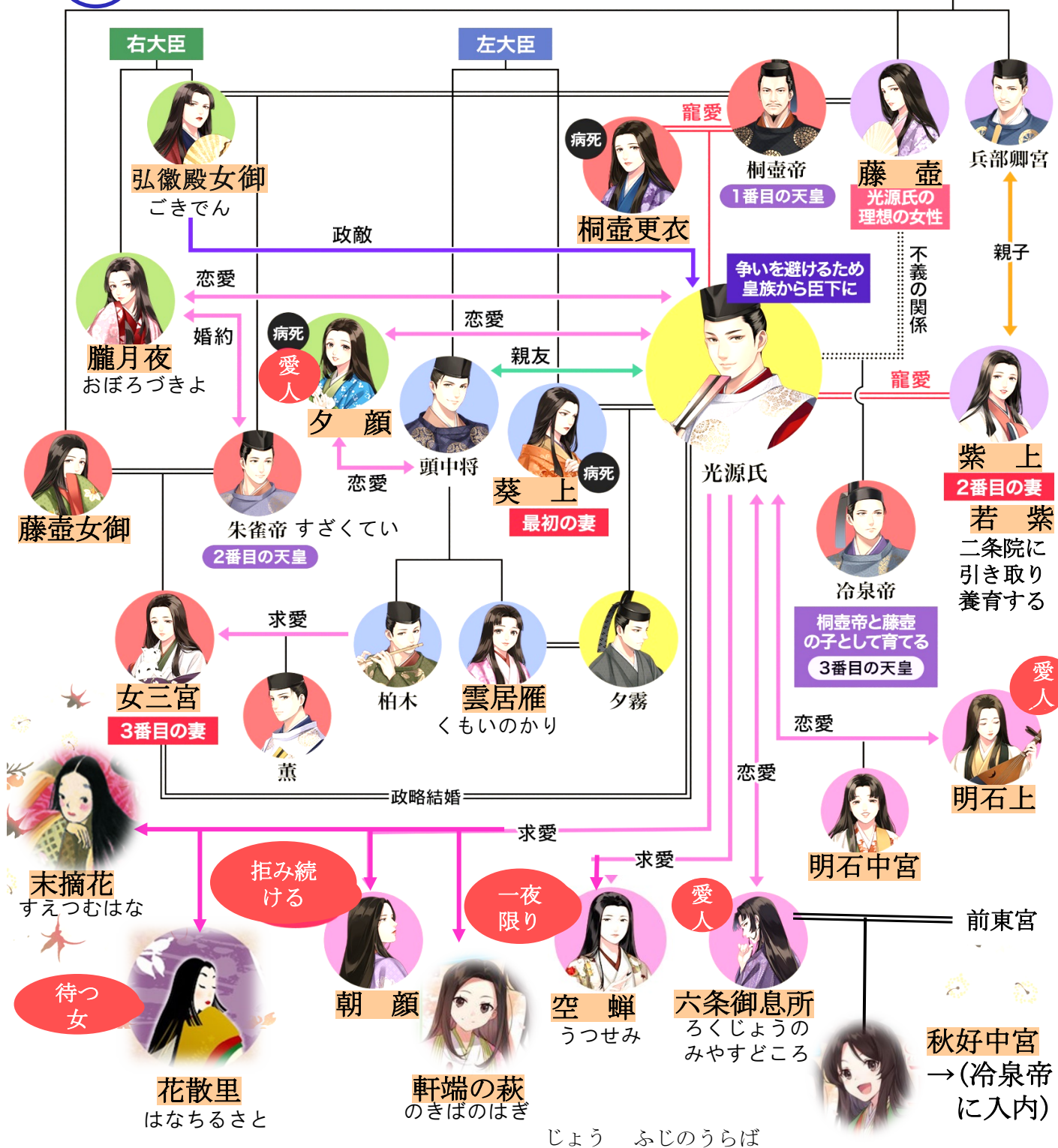
身のうさは 心のうちに
したひきて
いま九重に 思ひみだるゝ

宮仕えに出ても、わが身の憂さはいつまでも心の中についてきて、今宮中であれこれと心が幾重にも乱れることだ。



紫式部は、夫・藤原宣孝に先立たれた後、娘賢子を育てながら物語の創作に明け暮れていたと思われる。

やがて物語作者として知られるようになった紫式部は、一条天皇の中宮彰子のもとに女房として宮仕えに出たときに詠んだ歌。これまでの境遇と一変した宮中のなかに身をおいて思うことの多い心のうちを詠んだものである。



じょう ふじのうらば

- (1) 桐壺帝に入内していた桐壺更衣が、桐壺帝の第2皇子・光源氏を出産することで、物語は動き始める。 第1皇子は朱雀帝(すぎくてい)
- (2) 桐壺帝の寵愛を一身に受けていた桐壺更衣だったが、身分が低かったため右大臣の娘「弘徽殿女御」(こきでんのにょうご)を筆頭に、他の女御達から妬まれ桐壺更衣は心労で亡くなってしまう。
- (3) 光源氏は幼くして母を亡くすが、美しく賢い皇子だった光源氏は、桐壺帝から大きな期待を受けて成長する。 (次ページへ)

- (4) しかし、弘徽殿女御が生んだ第1皇子（朱雀帝）との間に争いが起きることを懸念した桐壺帝は、光源氏を臣籍降下（しんせきこうか：皇族の身分を離れ臣下となること）し、「源氏」姓を与えた。
- (5) こうして光るように美しいことから「光」、源氏性を得た「源氏」で「光源氏」と呼ばれるようになった。
- (6) 数年後、桐壺帝は光源氏の母・桐壺更衣によく似た美貌の女性・藤壺（ふじつぼ）を、后（きさき）のひとりとして迎える。光源氏は、母の面影を持つ藤壺に恋い焦がれるようになった。
- (7) 12歳になった光源氏は元服し、左大臣の姫君・葵上（あおいのうえ）を正妻としたものの、継母（ままはは）である藤壺とついに密通する。後に藤壺は光源氏との子（冷泉帝）を出産し、桐壺帝はこの子を我が子として育てる。
- (8) 尚も、空蝉（うつせみ）や夕顔、末摘花、花散里、六条御息所などと恋を重ねる光源氏だが、18歳の時 病氣治療のため北山を訪れた光源氏は藤壺とよく似た少女（若紫、後の紫上）と出会い、邸宅の一つ二条院に引き取り一緒に遊んだり、習字、絵画を教えたりしていた。
- (9) 数年が経ち、光源氏の正室・葵上は男子（夕霧）を出産するが、光源氏の愛人である六条御息所の生霊に苦しめられて若くして亡くなる。
- (10) 葵上を亡くし悲しむ光源氏を、紫上が慰めたことで二人は親密となり、22歳の光源氏は14歳となった紫上を妻に迎えた。
- (11) そんな中で光源氏は、政敵である右大臣の娘・朧月夜（おぼろづきよ：弘徽殿女御の妹）のもとに通っていたことが発覚し、須磨（現在の神戸市須磨区）へと左遷され、侘しい生活を余儀なくされる。
- (12) 須磨では明石上（あかしのうえ）と出会い、友好を深めるものの、都に戻ることを許された光源氏は、明石上を置いて須磨を去った。
- (13) この世は、藤壺との不義の子・冷泉帝の時代になっており、実の父と知る冷泉帝の計らいで、光源氏は政界に復帰。特別に准太上天皇（じゅんだいじょうてんのう：太上天皇（上皇）に準じた待遇のこと。）の称号を与えられ、光源氏は勢力を盛り返した。
- (14) そして、「六条院」に、春・夏・秋・冬の「町」に四分割された豪華な大邸宅を建て、春の町に光源氏と紫上、夏の町に光源氏と花散里、冬の町に明石上、秋の町に冷泉帝に入内した秋好中宮（あきこのむちゅうぐう）の里邸とし、優雅な生活を送った。
- (15) その後、明石上との間に生まれた姫君が東宮（後の今上帝）に入内し、冷泉帝から准太上天皇の待遇を受けた。光源氏の栄華は頂点に達した。

① 光源氏（ひかるげんじ）

父・桐壺帝の第二皇子で、母が身分の低い更衣のため「源氏」という臣下の身分に落とされ、皇位継承権もないままに育てられた。幼い頃から学問をはじめ琴笛に優れていた。亡き母に瓜二つの継母・藤壺を慕い続けることから、愛の遍歴がはじまる。輝くばかり美しい容貌から光の君と呼ばれる。

② 桐壺帝（きりつぼてい）

光源氏の父、弘徽殿の女御との間に第一皇子（のちの朱雀帝）がいるが、桐壺更衣への愛情は比類ないものであった。桐壺更衣亡き後に藤壺を迎え、光源氏を手許で養育する。藤壺と光源氏の不義の御子（のちの冷泉帝）をわが子として養育する。光源氏22歳の時譲位し、翌年死去する。

③ 桐壺更衣（きりつぼのこうい）

光源氏の母、故大納言の姫君。帝のご寵愛を一身に受け皇子（光源氏）をもうけるが、女御たちの妬みを受けて病につき、光源氏3歳の時に病死する。

④ 弘徽殿の女御（こきでんのにようご）

右大臣家の姫君で桐壺帝の正妻。第一皇子（のちの朱雀帝）をもうけ、朱雀帝即位後には皇太后となり、絶大なる権力をふるうことになる。妹・朧月夜と光源氏の密会を理由に、光源氏を政界から葬るが、朱雀帝が重く患われ、自らも病気になって、光源氏の復権を余儀なくされ、光源氏とは反目する立場にある。

⑤ 藤壺（ふじつぼ）

先帝の姫宮で、桐壺更衣亡きあと宮中に迎えられ、桐壺帝のご寵愛を受ける。光源氏は母によく似た美しい藤壺を慕うようになる。光源氏の継母にあたり5歳年上。光源氏との初めての逢瀬で懐妊し、不義の御子（のちの冷泉帝）を産み、桐壺帝崩御のあと出家する。37歳で死去。

⑥ 葵上（あおいのうえ）

左大臣家の姫君で、光源氏の元服の夜結婚。光源氏より4歳年上、高貴でとりすました姫君で、光源氏は親しみが持てない。葵祭りの車争いから御息所の生霊が取り憑き、皇子（夕霧）出産の後に亡くなる。心打ち解けてからの死去は、光源氏を大層悲しませた。

⑦ 空蝉（うつせみ）

伊予の守の後妻で、中流階級の心惹かれる女性として登場する。光源氏と一度だけ契りをもつが、その後はずっと逃げ続け、夫の任地へ下って行く。

⑧ 夕顔（ゆうがお）

頭中将が愛した姫君で3歳になる姫（玉鬘）をもうける。頭中将の正妻（右大臣家の四の君）から恨みを受け姿を隠すが、忍ぶ仮住まいで光源氏と出逢い愛情を交わす。しかし、六条御息所の生霊にとりつかれて、儚い命を落とすことになる。優しく素直な愛らしい姫君で、亡くなられた後も、光源氏は忘れられずにいる。

⑨ 六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）

光源氏の亡兄・前の坊（皇太子）の未亡人で、姫君（のちの伊勢の斎宮）がいる。光源氏より7歳年上で、美しく高貴で教養深く、物事をつきつめて考える性格。それが生霊となって、夕顔や葵上を苦しめることになる。娘に付き添って伊勢に下るが、任期果て上京すると、娘（のちの秋好中宮）を光源氏に託して病死する。

⑩ 紫上（むらさきのうえ）一若紫（わかむらさき）

父・兵部卿の宮（藤壺の兄）が外につくった姫で、母を亡くし祖母・尼君のもとで育つ。光源氏が北山を訪れた時に見付け、愛しい藤壺の面影に大層良く似ていることから、二条院に引き取って養育する。光源氏が生涯を通じて愛し続けた姫君である。光源氏40歳の頃、朱雀院の姫・女三の宮（13歳）を妻に迎えてから病につき、出家を願いますが許されないまま43歳で病死する。

⑪ 朧月夜（おぼろづきよ）

右大臣家の姫君で弘徽殿の女御の妹。朱雀帝に入内することになっていながら、光源氏と密会を続け、これが発覚したことで、弘徽殿の逆鱗にふれ、光源氏は、須磨、明石へ流離の身となる。その後、朱雀帝の寵愛を受けながらも、内心は光源氏を愛し続け、帝の正妻でなく女官の最高位・尚侍（ないしのかみ）として朱雀帝に仕える。

※流離⇒故郷を離れて遠くをさまよい歩くこと。

⑫ 花散里（はなちるさと）

あまり美人ではなかったが、良妻賢母な優しいお姉さんタイプ。光源氏の浮気にも寛容で、逆に面白がっていた節もある。光源氏の通いを信じて待つ姫君である。

⑬ 明石上（あかしのうえ）

光源氏が須磨から明石へ流離の身となっている時に、出逢った明石入道の娘。琴の名手で、寂しい君の御心を慰めることになる。光源氏が帰京してから、女の御子を出産しやがて姫君は紫上の養女として京に迎えられ、その後、明石の上は六条院に上がる。

⑭ 玉鬘（たまかづら）

頭中将と夕顔の間にできた娘。頭中将の妻にいじめられ、夕顔の乳母に預けられ、筑紫に下り行方知れずになる。美しく成人して上洛し、光源氏に引き取られるが、その美しさが宮中の評判となり、多くの男達に慕われる。遂に、鬚黒の大將と結婚し、2人の姫君を持つことになる。

⑮ 頭中将（とうのちゅうじょう）

左大臣家の御子で、光源氏の妻・葵上の兄。舞や管弦の嗜みに優れ、光源氏にライバル意識を燃やしながらも、一番親しめる人でもある。右大臣の四の君と結婚。また、夕顔との間に女御子（玉鬘）をもうけるが、行方知れずになり捜し続ける。

⑩ 夕霧（ゆうぎり）

光源氏と葵の上との御子。左大臣邸で育てられ、元服を機に光源氏の厳しい教育方針のもとに、勉学に励むことになる。内大臣（もと頭中将）の娘・雲居雁と幼なじみで愛し合っているが、内大臣のお許しがでず苦悩するがやがて雲居雁と結婚する。

⑪ 雲居雁（くもいのかり）

内大臣（もと頭中将）の娘。光源氏と葵上の御子・夕霧と結婚する。

⑫ 朝顔（あさがお）

父の桃園式部卿宮の喪に服するため齋院を退いた朝顔。そのもとを訪れた源氏。長年の想いを伝えるが、取り合おうとしなかった。

⑬ 軒端の萩（のきばのはぎ）

伊予介と前妻の娘で空蟬の義娘。暗がりでも空蟬だと勘違いした光源氏にと関係をもった。ぽっちゃりで空蟬より可愛い。

⑭ 末摘花（すえつむはな）

源氏物語中では比較的綺麗でない女性として書かれた稀有な人物。しかも当時の貴族の必須科目だった和歌も下手で、家柄も没落貴族。そのようなハンデを負いながらも源氏を想い続けた素直で一途なところがあり、最終的にその心に感動した源氏に妻の一人として迎えらる。

⑮ 秋好中宮（あきこのむちゅうぐう）

六条御息所の娘で光源氏の養女。

⑯ 惟光（これみつ）

源氏の君の乳母（めのと）の息子で、源氏の君が一番信頼する家来。

⑰ 右近（うこん）

夕顔の姫君にお仕えする女房で、部屋を与えられた女官（妻ではない）夕顔亡き後、二条院にて源氏の君にお仕えすることになる。

ある日、筑紫から上洛する玉鬘（夕顔の遺児）と偶然出逢い、二条院に連れてくる。

⑱ 少納言（しょうなごん）

紫上にお仕えする女房。北山から二条院へと紫上ずっと付き添って仕え続ける。

天皇

律…刑法

令…それ以外の一般法規

摂政

決済

関白

天皇が幼い時、女性が天皇の時、病氣の時におかれた役職で、天皇に代わって政治を行う。

天皇の成人後に政治を行う役職で、天皇に差し出された文章を天皇より先に見てから天皇に差し出す。

奏上

太政官

じんぎかん

神祇官

神祇・祭祀を司る

くぎよう

公卿会議

太政大臣

※不在の場合も

左大臣

右大臣

大納言

中納言

参議

左弁官

少納言

右弁官

外記(書記局)

中務省

なかつかさ

八省中、最重要の省。
詔勅の起草、後宮関係の事務

治部省

じぶ

喪葬・陵墓・外交事務、僧尼・仏事の監督、雅楽

民部省

みんぶ

民政全般、戸籍・計帳の管理、徴税と国家財政

式部省

しきぶ

文官の叙位や任官、朝廷儀礼・儀式、大学寮を統括

兵部省

ひょうぶ

軍事全般、武官の叙位や任官、諸国の衛士の管理

大蔵省

おおくら

貨幣鑄造、度量衡の公定、朝廷の大蔵の管理

宮内省

くない

宮中の庶務全般

刑部省

ぎょうぶ

裁判・刑罰の執行、監獄の管理

太政官符・宣旨

報告

諸官司・諸国



- (1) 国分寺は、総社の北隣に道を挟んである。
延暦寺の末寺で、500㎡ほどの敷地には、大正11年(1922)建立の本堂・庫裏などがあり、**平安時代後期の木造薬師如来坐像を本尊**としている。
- (2) **天平13年(741)聖武天皇が仏教による国家鎮護のため、国分寺・国分尼寺造営を詔(みこと)のり**し奈良時代末期までには、ほぼ全国的に造営された寺院である。

- (3) 越前国は、加賀や能登をも行政下としていた大国であり、国分寺の規模も相当なものであったと考えられている。
- (4) 現在は、場所も移転し規模も縮小されている。(本来あった場所は不明)

総社大神宮

- (1) 総社大神宮の主祭神は国造りの神である**大己貴命**(おおなむちのみこと・大国主命)である。
- (2) 旧北陸道に面して、旧福井藩松平家19代当主の筆による「**総社大神**」の大石標がある。また、参道奥にある二の鳥居の額の字は、東郷平八郎の筆である。
- (3) 社殿南西には「**越前国府**」の石碑が建立されている。
- (4) 総社大神宮は過去に何回も火災に遭い、現在の社殿は大正15年(1926)に建立された



- (5) 国司は毎年、赴任した国内にある主な神社を巡拝・奉幣(ほうへい)することになって
いるが、平安時代になると一宮・二宮以下の神社の祭神を国府近くに勧請・合祀して総社が建てられ、総社を参拝することで国内各社への巡拝に替えた。
- (6) よつて、総社があるということは近くに国府があったことを示している。

栄・生のいた加当国前、つにはか
えて文化の国賀時の分・七た。及敦
て文化の永府。のの越割中・世。ぶ賀
きたのくが。大能越前され・紀この
中心政治か「登前はれた越にの
とし・経た越のた後には、越の
済武「含のちがの、三越はあ
(略)



- (7) **紫式部の父・藤原為時**も“総社”を参拝したと考えられる。！？

- (1) 越前市庁舎玄関に向かって左側に府中城跡を示す「**越府城址**」(えっふ)の碑がある。
- (2) **越前国府**があったことから府中を「越府」としており、国府の施設はこの辺りであったと考えられている。 しばし
- (3) 府中城は、文明年間(1469～1487)頃に、斯波氏が越前国守護代をここにおいた**府中奉行所**が始まりとされている。 ※その後、下段の(12)(15)(16)へ



龍門寺・龍門寺城跡

- (4) 龍門寺は、正安元年(1299)の開創で、その後、城が築かれ、この地は府中の南端にあることから軍事上の要所とされていた。
- (5) 龍門寺城は天正元年(1573年)、朝倉方から織田方に寝返った富田長繁が築いたという。
- (6) 天正元年(1573年)8月、越前国に侵攻した織田信長はこの城に入城した。
- (7) 信長は朝倉義景を滅ぼすと、降伏した前波吉継を一乗谷に置いて越前国を治めさせ、富田長繁を府中の政務に当たらせた。
- (8) しかし、程なく前波吉継と富田長繁が敵対し、天正2年(1574)1月に富田長繁が前波吉継を滅ぼして越前国を支配下に置いた。
- (9) だが、この過程で富田長繁が扇動した一向一揆との対立が深まり、富田長繁も2月に討ち死にして、越前国は加賀国同様「**百姓の持ちたる国**」と化した(**越前一向一揆**)。
- (10) しかし、**本願寺側と門徒農民が対立**し結束が乱れた。
- (11) これを知った信長は、天正3年(1575)、3万の大軍で再度越前に侵攻し、羽柴秀吉・明智光秀らに龍門寺城を攻めさせた。再び龍門寺城で陣を取って、一向衆に対して苛烈な残党狩り(僧700人、俗11,500人を討ち取る)を行い**越前一向一揆を鎮圧**した。



- ※ (12) 信長は、越前一向一揆鎮圧後、柴田勝家に越前を任せ北ノ庄城に置いた。目付け役として、府中とその近辺の十万石を府中三人衆(**不破光治を龍門寺城、佐々成政を味真野に小丸城、前田利家は府中奉行所を改修して府中城**)に与え支配させた。 ※上記(3)

- (13) 龍門寺城は、1580年に不破光治が死去したため、府中の所領を利家の嫡男利長に与えている。
- (14) 1583年、賤ヶ岳の戦いに敗れ敗走する柴田勝家を、**前田利家と妻まつ**で迎えた。翌日、勝家を追ってきた羽柴秀吉も利家とまつが迎えた城である。



- ※ (15) 府中城は、前田利家の後、前田利勝(利長)、丹羽長家、木村常陸介(ひたちのすけ)、青木一矩(かずのり)、堀尾可晴(よしはる)が相次いで城主となる。
- ※ (16) 関ヶ原合戦後の慶長6年(1601)、結城秀家の越前入国に伴い、府中城は付家老本多富正に預けられ、以降、本多氏が3万7千石を与えられ、明治維新まで府中とその周辺を治めた。